

序

今世紀初頭あるいは20世紀末あたりから、日本のさまざまな分野でさかんに取り上げられだしたキーワードに、「キャラ」もしくは「キャラクタ」【注1】というものがある。もっとも、これらの語の持つ意味合いは分野によって、また論者によって異なり、いま「「キャラ」もしくは「キャラクタ」と両語を併記したのも、論者によっては「キャラ」が「キャラクタ」の略語ではなく、別の用語として定義されているために他ならない。しかしながら、それらの「キャラ」論あるいは「キャラクタ」論の間にゆるやかなつながりを見て取り、たとえば「人物とは何か？ 人物が状況に応じてどこまで変われば、もはや「同じ人物ではない」ことになるのか？」といった、大まかな共通テーマを見出すことは決して不可能ではない。このような大局的な視野に立った時、近年の日本は、アイデンティティの確立より「キャラ」の使い分けが大事な時代（岡本2010）、社会の全般に「キャラ」の分析が必要かつ可能な時代（相原2007・暮沢2010: 27-28）とされるように、「キャラ（クタ）」論の台頭が無視できない状況となっている。

その一方で、編者が漠然と感じ続けてきたのは、こうした「キャラ（クタ）」論の波を阻む二つの「壁」があるということである。

「壁」の一つは、日本と海外の間に立ちはだかっている。「キャラ（クタ）」論の隆盛はあくまで日本内にとどまり、海外に広まっていく気配は（少なくとも編者には）見えない【注2】。

もう一つの「壁」は、言語学をぐるりと取り囲んでいる。言語学は、人間を視野に入れるはずの語用論においても、「キャラ（クタ）」論に関して概して消極的で、他分野の「キャラ（クタ）」論とのつながりも不明である。

言語と「キャラ（クタ）」の関係を観察し、英語版・中国語版も含め

てインターネット上で公開してきた編者の活動は【注3】、いま振り返れば、これらの「壁」の突破に向けられたものと言えるかもしれない。活動十余年目にして【注4】、ようやく二つの壁は音を立てて崩壊、とまでは行かないが、小さなひび割れぐらひは起こし始めたようである。現在、この「キャラ（クタ）」は国際学会でのパネルのテーマとなり、一部の欧米思想との親和性が論じられるようになってきている。また、社会学（例：土井 2009）で論じられる「キャラ」が、「伊藤（2005）の「キャラ」（Kyara）を援用したもの」という論者たちの申し立てとは裏腹に【注5】、編者の「キャラ（クタ）」に意外に近いこともわかってきた。

この論文集は、以上の動きを契機として、日本国内外の最近の研究成果（主に以下 (1) (2) (3)）をまとめ、新たな展開と、新たな研究世代を呼び込もうとするものである。

- (1) 日本語文法学会パネルセッション「日本語とキャラ」（2015年11月15日、学習院女子大学）
- (2) 日本語学会ワークショップ「キャラ・役割語をめぐる問題とその検討」（2016年10月30日、山形大学）
- (3) 国際語用論学会第15回大会パネルセッション Japanese-born “characters” meet European and American insights. (2017年7月19日、ベルファスト)

各論文の紹介は、冒頭で述べたように「キャラ」「キャラクタ」に関する用語法が少々込み入っているため、変則的な形になるが、それを整理した上でおこないたい。

収録論文は四つの章にまとめられている。第1章「さまざまな「キャラ」」には、「キャラ」「キャラクタ」の用語法に関する二つの論文が収められており、論文の紹介は、そのうち第1論文（拙論）の中でおこなっている（より詳細な用語解説は定延（近刊）を参照されたい）。第2章「物語世界のキャラ論」には、創作物における或る種の「キャラ」を扱った